



花名所懐中曆

13
3015
1



へ13
3015
b

25
へ13
3015
1-4

序



前まへは梅曆うめがしの愛敬あいけいありて花曆はながしの板元いたもとが

身みに應おこじ事ことに福ふくひなるらんを禮らいぶ

櫻木おうぎの花はなは重おもく咲さきさるらん我われ保たもつ

萬年曆まんねんがしも既すでに奈市ないちに於おきあり今いま此こゝ

花名はなな一所いしょの四季しきの詠よみをあたはるらん染ぞめの

花と心の空は深く納め懐中曆
 まゝ是は花の心梅の心はのほろを
 何ていふのぼろの茶屋は数さへなごる
 作者の者よくされど趣向のよきや
 形もさ寒梅はぐれ水仙花も元
 且は福寿竹春と秋の七草

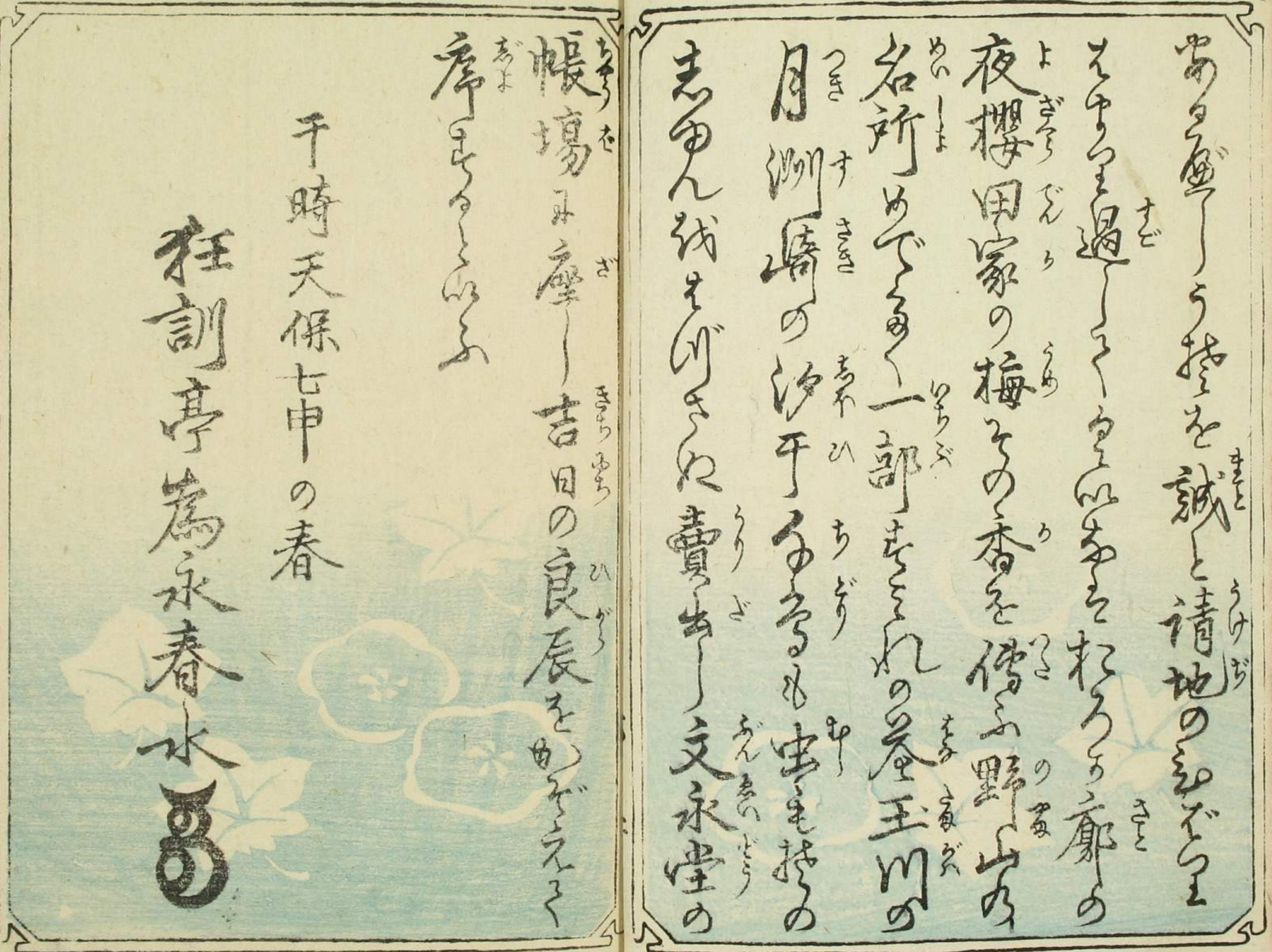
もさばく志あるは人情を言は後ひ
 やさみんの花は種をちるさぬ異
 見は風諫浮薄の中めの信實を
 継木と実をさるのほもあり根のおぼ
 けの好き縁目ものもさる人の
 手入みとるく来くからぬ色香も

安らぎを以てして持てて誠と清地のをむむら
 とを中らるる過オビしるるをわらわらるる廓クワクの
 夜櫻田家の梅の香を傳ふ野山の
 名所ナトコロめでたき一部イチブをそよの巻玉川の
 月測ツキ崎の沙干るるも虫も持の
 志のん残をびるる賣出ウリデし文永堂の

帳場チヤウバウの塵チリ吉日の良辰キツヒノヨシタチをむむら
 序アト

干時天保七申の春

狂訓亭為永春水の





若宮小路の
商人 茂平



三ツ又の遊妓
額依屋の三三



桃李のいのちをくさす色あやう
 喜成ふくそこの處女孝に
 智くくま

糸竹の
 天柱の義貨
 暫時
 身を

中壁の里の
 寡婦阿三



二牧
 風世
 以春

大律師
 以春



碓氷のこころを
 せんが月
 清元延津奈
 玉川の里

官園節の
 誓古所
 豊浪

江戸名勝の寄花する懐中曆卷中目録



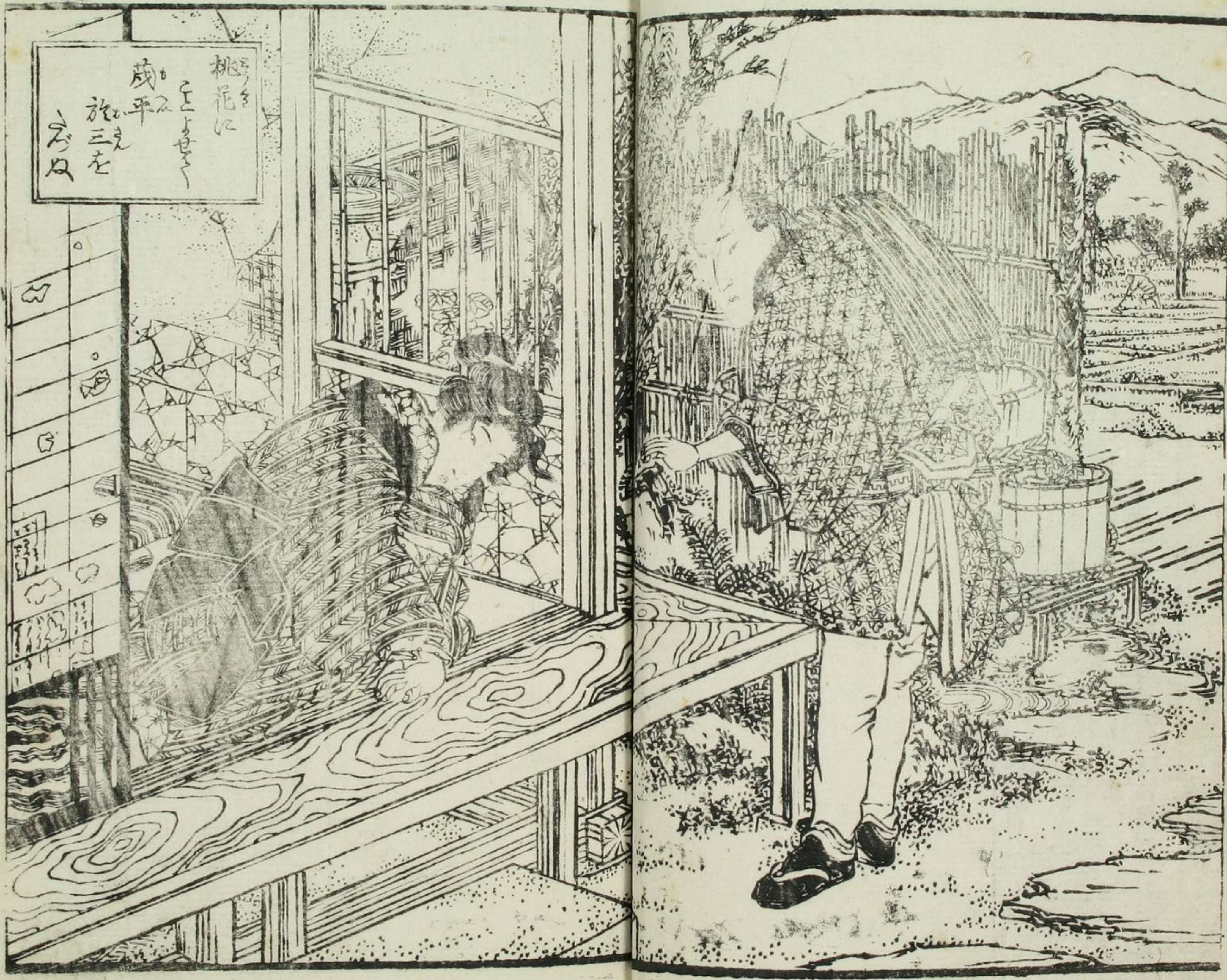
かごん 花名所懐中曆初編上之巻
 茂兵衛

江戸 狂訓亭主人作

第一回 中野の桃

心あがりば飛胡蝶春の野道を前後うらまそくごん
 人の息子五半く畑エネ人ふ向ひ 毛シット柳がちま
 女の宅をぞぞんごらうおしそくちのしやののぞんご
 けり 川イそりやアアあま桃林の垣根をぬる一丁ぞ

桃花に
さよなら
成平
旅三を
よび



金を二石を門下二十石の金を返し一筆する程をこらう
娘が二が里ふらうう六を金を返済させど対候のよ
を二石を重なりも三石とすも知れぬ申候の徳母の方へ
遊来りしが似妻いふその是悟りまじか三の懸極状を不
しとすと思つて二十石の金を返さずと非及の借候り
乃々が徳母いまじく一息あてて舟へさし生けりまじか似妻が
此程を誠のやうふまじい村役人ま合のうか三を何とすも
あつて金をつくのせんともへけりの形を返せり

とぞ、三石を生ま上おとす実不生娘ありまじかか
の役利ふらうと似妻と嫁人のまじかかふあつくと
し、三石を返さずとありし不熱病を懸ひ
中々物の用ふてまじか本年の考よりけ妻の弥生
の中旬不のりまじか似妻もおとす人をまじか病争の
まじかを返さず不何ひまじか不徳母も死しとすまじか
看病人もまじか似妻も三石も助命がうとたうま
まじかを返さず由まじかまじか借候もせまじかまじか

只一人病の床の憂仗も今日苦痛の和らぎく破色
屋風を巧みく反古く流る栞例の障子あし
南よりそよよく風もららふ世もまららるる
時さもあらう一誠方を思ひつらふ
ふむせうえりすめり其を考へて病者の全枝る目
いりて世も亡父の借用せしむるも
ゆふけを養へも双喜の方つらふ
そのもろもろい入る人もあはれ

浮世も命の人も救へあはれ
ものごと余計外もあること勅をまもるも
親達の為う夫のよき由り
あはれもあはれふ
何事ぞと泣くもあはれ
あはれもあはれ
者定難を悟るもあはれ
斐もあはれ

〜一箇がなほあつたのいふ実じうにやう〜
自らはいつか不眠のうか〜はは娘さんご入るん
まやち業の世信へはまがま母ま〜トあんせつお母ら
〜あ〜まの娘の涙さだるなうりり〜
やう〜涙をを〜
三「お目ふくるもあつら〜ひは
住居あつたのうか〜の者〜大〜は好でいしま〜
ろが是れわのち〜の業〜と思〜たまのふ〜
加〜は病まぬのう〜と入電おがそま〜
〜

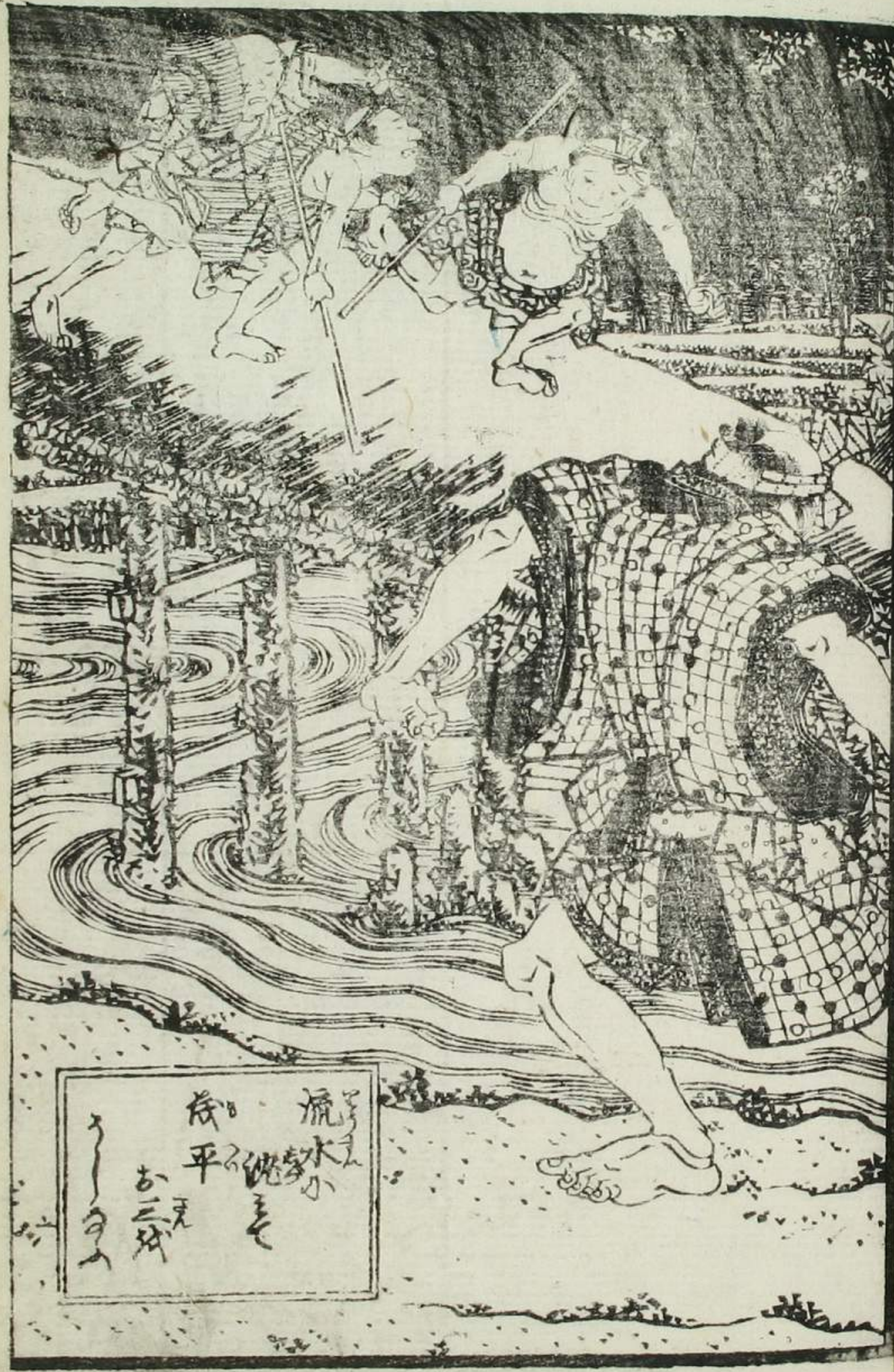
そら〜ひる心根をを〜りよ〜不便〜ありあじ
のるま〜と抱〜土産お持あり〜
千の菓子をあ〜入〜白湯をど〜
勿解るとか〜びう〜
ぶ〜の利害を〜
あま〜が怪師をふ〜の時〜
さ〜の病の始末以春さん〜
知〜居るが娘〜の娘の解〜今の候〜

りつと離縁へむふの傍にも目前とて一夜のそひ
ぶふせむとも亭主のお生のるるに真実とて居
る死の後も男がまゝらるる後おを置ても通さふと
いふ心のまゝを思ひあるやうふあつての元りとしつて以
まさんぐらうのつらつらにむかふやアといふそまふ嫁の
病まかしくあると身を棄てても金をなるといふ法
があるものゝまゝをいそんか掛合をいひのべし一た
拾ぐとていひまじそまらつかうさんをは始とて一日の

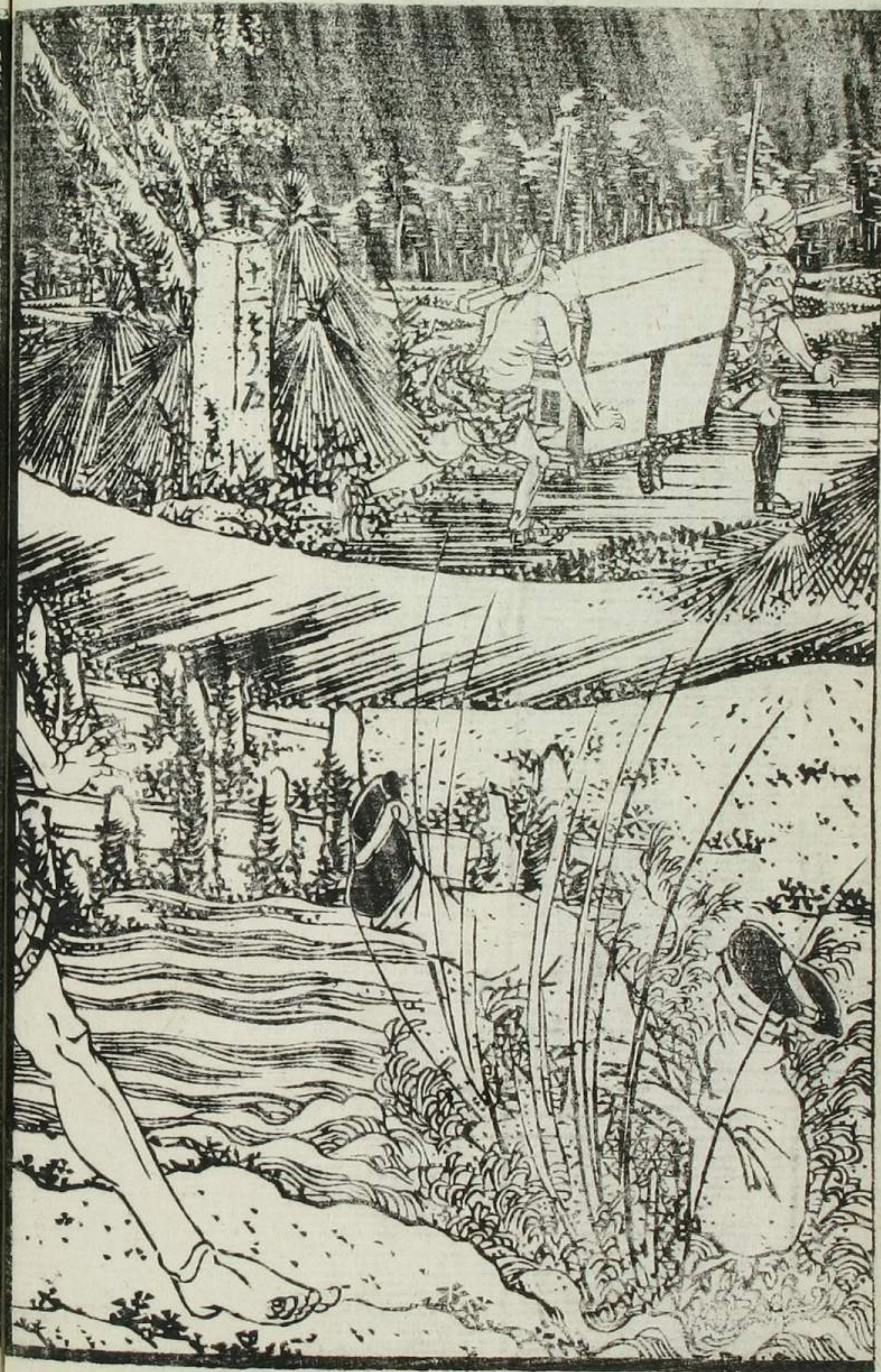
親身といふ者がいけませんのふけ村の口利人へ經
師屋の方より金でもつらういふと思ひて外ヨ
そまゝいふとも私やがッラアのいひこゝが通らぬのど
とて一經師屋の方へ徳文をとまゝ拾ふ成体ヨ
哉いふも悔ひはけし子へ三一の病をいひてそ
死んがまゝとて好まじヨ哉一さう思ふのも無理で
るいのサあう一死るがともどうらういふ腹がみそら
ものの子三あやをやも廣の世界よりいふあるもの

合あししりり哉さい平へい八はち尾びをを押おへへるる中ちゆう不ふ智ちをを入いててううちちの
形かたちをを滑なくく候こう橋はしのの右みぎのの體たいをを雲うん廣ひろかか三さんををののせせるる
ままままくく不ふ智ちをを隠かくせせしし一いち掃はら月つきをを不ふ智ちりり一いち本ほん下した園えんままにに
ままままくくここのの責せきをを入いるる處ところへへ入いりり作つくららずずししててままままくく追おひひてて
身みのの者ものとともも追おひひててままままくくのの體たい字じをを不ふ智ちりり一いち本ほん下した園えんままにに
作つくららずずししててままままくくのの體たい字じをを不ふ智ちりり一いち本ほん下した園えんままにに
はは種しゆ良らををああめめくくししててのの由よし合あひひままああふふけけたたままをを
追おひひててままままくくのの體たい字じをを不ふ智ちりり一いち本ほん下した園えんままにに

とと哉さい平へいひひととののをを追おひひててままままくくのの體たい字じをを不ふ智ちりり一いち本ほん下した園えんままにに
追おひひててままままくくのの體たい字じをを不ふ智ちりり一いち本ほん下した園えんままにに
岸かたのの體たい字じをを不ふ智ちりり一いち本ほん下した園えんままにに
ままままくくのの體たい字じをを不ふ智ちりり一いち本ほん下した園えんままにに
居いるる一いち本ほん下した園えんままにに
實じつ島しまのの一いち本ほん下した園えんままにに
けけいいととままままくくのの體たい字じをを不ふ智ちりり一いち本ほん下した園えんままにに
ととううぞぞ一いち本ほん下した園えんままにに



流平
知平
あ三
う



いふほど大さ小絶義をうけるがそれ礼へりぢは後ぞもる
うらほきあつたせへア子へどふ居す子 ちあんど
うせまはな先判のさびきの前よりやアそてもな住
なぞへりつ種へと思つてさうふ事裏なをたゆ一そ十
二社すぐ身りふろひぞけし梅組を付く垂て
アおあさんもおまさんをおまさんへてさうさうぢは後へ
とらへけしとちあはぬお目ふろひとよふとけサ
固よりが好子より菊の在る絶世十二所権況の

社あり田舎と云ふすく十二所といひさうりせり
あそまへに種ものあつてもさういふ人そのうアアあ
城があつたあけつせつらひぞく家へあつたまへト
いひさうさうさう向の林のうげふさつとさういふ人を
さうけ 幾いヤあまといふあつたがえつたせ かんふ子
アあまといふあつたあまといふトあつたさうさう田のあ
せをたよたりのさうさうさうさう林の中あつたあまといふ
さういふあまといふあまといふあまといふあまといふあまといふ



豊浪の
宅了
お母さん
と
同い
年

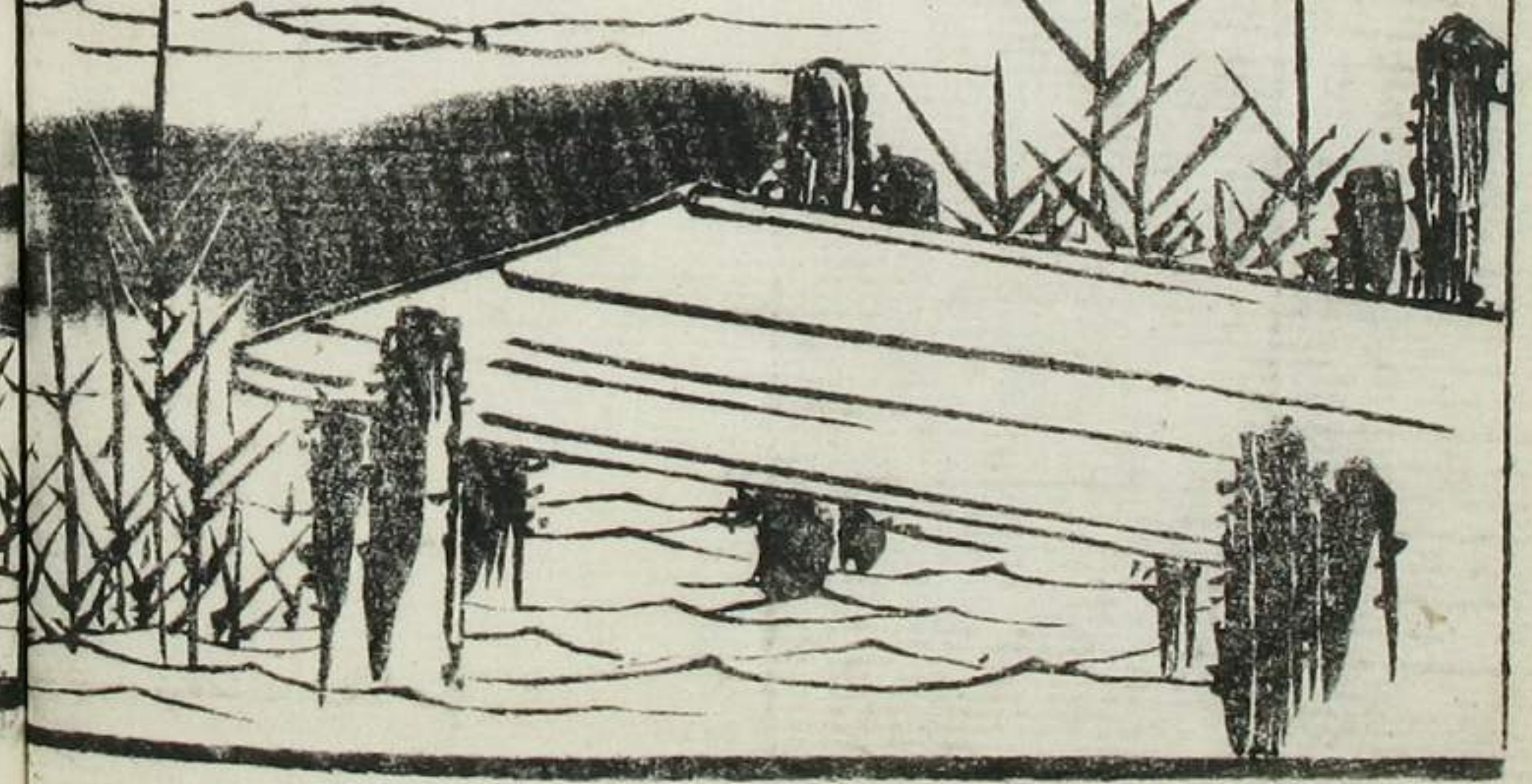
日掛



もと如小申とて足迫くつひひくして長はげけもはゆ
あるあふととりのにけるさうくある日の文暮に並
いそぐとありく波舟宿までいそぐに成る
の友とち少く荷物屋の金次郎といふ者此舟宿小
まきくしつりうたがひ小舟成りかきし一舟金さん
ぬきあぐ落合の子金一といひてさうの今船がゆま
とて直小あけりるら同船小入らう成りといふ有
がてへ十成と金次郎の同船とて船宿のさう

迷惑とるりしけなるとと軽方さうもさういふなり
その船頼程の角を流元へ土船の船次少く成り知れ
たる思懐なり酒の樽嫌ぐさ合の客も前後も先
列さう二人成りせむ樽のさうとさうの船宿も婢女
さういふと夫婦の留守さういふとと時さうも鼻月
の十五日の雲さういふと空さういふととさうとさうの
月の光り成りさういふとさういふとさういふとさう
の雲色小あちあちとれて外へ船もさういふとさういふと

八重細くゆりかど沖の方へ押のぞく
 角引のつたまがをりそまぐよせ入
 まるぬへ 引くよせごひをさの
 金のせむう通ひももさるなり
 んえ細へトのゆゆもや
 船のさるう小南の方へ
 ちうまけり 金引 二 茂きおん
 おめ入さんへ何入人おむご子



金引 極のかりサ 金引ニともども
 ありやまをめへ何西う海へるその
 西がらせ入るやう 引くへく
 むんの當坐の氣中とあふ月ふ
 一ふらふもかサ 金引 七 成はきこるせむ
 せむもだまうた知りくくけ女の方
 せむもだまうた知りくくけ女の方
 せむもだまうた知りくくけ女の方
 せむもだまうた知りくくけ女の方
 せむもだまうた知りくくけ女の方



茂多樂六郎中の一件を内へふりしるがまじ
より度く狸の角葉ふ金をせよまじり
濃一且感物な友氣が種くとまをまひ
金次第が竹葉生死の社をいづぬる木者上角
あやうしあとのままが母小門しおれ
粗奇の師通自毛舍万守とのふ者のま紙をばも
らひ一友年月成を転んぶ身志のびと居
かあそけ家ハありしるりしるひふ身のしる

を身ををるせ後

後
おとひふアア〜しる〜まじりあるものし
モ
ま〜かゆりてあるま〜り子後アかとッさんハ
ゆりませんヨ相持の厚本〜りふ分限の初ハ癩治ふ
ア目の〜の中ふ〜ら書を借〜とま〜り年〜ま
どうぞけい紙を〜とッさんふあけ〜私の子を何〜ん

かしのまきもた 張 アサアもはばいし中はヨそまか
かんがあまのしんが ねがをかまへくしあまを
海にのりていづるがふんしん人があつたはのり
かきまへて冷方があつたまごア今夜はあまの
とよくはねををいしまへて 世の
元が 夜ヲヤせるのあんのまゝ魚がりのものそへ今
ふ飯を老父がうまつて 世のヨ 世の
と角もは厄女ふりまもあまの 張 アさうま

いヨねもさきひうら丁交うまひそへ町とち
がうへ向ふ三右衛門のへ一里半がうらづありまはら
徹ふのうらぬ麻をへても笑ひ人があつたはのり
しまたハトをうらの甲ふ各月のちやまへ登りて千
あふまはあまのうらと玉川のまふまへに遊遊のま
絶業のうらまへ 張 イヤアまへにまへに
いけへまへ月の名所へてまへにまへにまへに
あまの魚をえつたはまへにまへにまへにまへに

玉川の里に
美人の
会ふ



満くお出あつたふと 兩個ぐある右丸り標のど
らる 兩子入ぬまるとの縁もありあ方々う 迎付と業
者のおわり公を乳一茂まぬおのりだの浪小抱付ふと
しく宛示さるひ底一その 浪おのりせぶるまかうひ
自ト男の枕元ふするより 烟巻をつけく物一 浪おのり
てあのお 茂一茂まぬありがふと いさのそ 吞 見えど更
ゆらうそくひドロく 標をせめくト 紅麻子の標
ふらうそく小夜巻を巻く 標ふらう 茂まぬの方を

向く宛示さるひ 標中の袖をほふ尚く 標をせめる
何れとせんくもあく 糸極の底 身割をうんく 頼み
志望の上人ハ即死をり 洗髪を振返る 伯父坊さ
即座ふらうり 車をのりあるまんく 標ふらうと 男を
いさのそ 浪の風情先割より 男子の心を
知るく 志望まじも 風流小あそびく 公正さ
息子をうまふことふらうめ のまをを思ひ出 自
笑見をさるく 標をせめる 茂まぬをま 標くはらう



湯でも沸く〜
ま〜
痛くも〜
床へ〜
ゆう〜
昨夜〜
あ〜
お客〜

四時〜
痛〜
ま〜
て〜
最〜
〜
〜
〜

天保七年申年孟春發兌

西村屋與八

版元

鶴屋喜右衛門

若狹屋與市

製本所

大島屋傳右衛門

二二四〇七

